【社会科教育法Ⅲ】　第３回課題の解答（第７講用）

問１

安永 早紀

①　B（解釈教授型）

②　私は「沖縄の産業」は B の解釈教授型であると考える。B の特徴として教科書の展開通りに授業を進めない・生徒の疑問追究という生徒の関心と疑問に重点をおいた授業展開をすることが挙げられる。「沖縄の産業」と B には次のような類似点がある。

１つ目に教科書の展開に沿わない授業進行という点である。この授業では教師自身の旅行記が教材として使われていた。この旅行記に沖縄の特徴が書かれており，教科書よりも生徒が親近感を持たせ，内容を把握しやすく内容に対する疑問が発見できるように工夫されていた。

２つ目に教師は常に生徒に疑問を投げかけ，それに対する生徒の答えに沿った授業展開をしていた点である。教師はこの授業の中では生徒の疑問に対する明確な答えを提示せず，地図帳などを用いさせて，生徒自身に疑問に対する結論を導きださせていた。

以上の２点から「沖縄の産業」は B であると考える。

後藤 麻菜美

①　授業類型　B（事実解釈教授型）

②　理由

全体を通じて子どもの意識に着目し授業を展開している為。具体的には，子どもに疑問を投げかけ子どもたちの考えや思いを自由に引き出し，最終的には用語だけでなくなぜなのかという疑問を解決していく段階まで授業で取り扱っており，きちんと要素をつなぎ流れをおさえている。また，要素と関連付けた解説や説明も授業で行っている。

教科書と先生の学習指導案によれば，おきなわは太平洋戦争において激戦地となり多くの犠牲者を出し，その後長期間アメリカ軍の占領下におかれたという。占領下の中，独自の文化が発達し自然を生かした観光業が盛んになっていく。授業ではこの背景を地理的事象と関連付け多角的に考察し最終的には，沖縄県の産業の特色を理解させようとしている。

上記のことからこの先生は，事実と解釈両方を取り入れ授業を行っている為，B 型の授業を展開していると予想できる。

田中 友紀乃

私は「沖縄の産業」は，B の授業類型に当てはまるのではないかと考えた。

「沖縄の産業」では教師がたびたび「なぜ」，「なんで」と子どもたちに尋ね，疑問を感ずるようにしていた。そして，その感じた疑問を子どもたち自身で解決していくという授業展開だった。B の授業展開でも，たびたび「なぜ」という疑問を子どもに抱かせ，その湧いた疑問を解決していく中で，学んでいくという授業展開だった。

問２

花房瞳

「沖縄の産業」は，「ヨーロッパの多様な農業」と比較して，多くの資料を活用し，子どもたちに教えていた。「ヨーロッパの多様な農業」は，教科書に書いてあることを少し詳しく解説し，重要な用語を子どもたちに覚えさせる傾向があった。しかし，「沖縄の産業」では，教科書を教材（学習材）の 1 つとして用いて子どもたちに考えさせていた。地図帳や教科書の統計資料，『ひろし君の沖縄旅行記』の読み物資料を分析し，説明していた。

また，「沖縄の産業」では，さまざまな視点（第一次産業，第二次産業，第三次産業）から，沖縄県の地域や産業の特色，構造を子どもたちに教えていた。そのため，子どもたち自身が疑問を発見しやすい資料を教材として使い，疑問を発見させ，みんなで解決していた。しかし，子どもたちから疑問を出させるだけでなく，先生も「本当に正しいのか？」，「困ったね。」と子どもたちの疑問に対する答えをゆさぶる発言をし，さらに探究していた。

この授業は，しっかりとテーマ，視点をもうけており，狭く，深く子どもたちに教えている。

勝田瑠理

「沖縄の産業」と「ヨーロッパの多様な農業」の違いは 2 つあると考える。

1 つ目は，生徒の授業をうける姿勢だ。前者の場合，生徒はほとんど黒板を向き，先生の話を聞いて発表する。後者は，個人で考える時間とグループで話し合う時間，そしてクラス全体で発表しあう時間にわけられる。2 つ目は，授業教材の違いである。どちらの授業も教科書や資料集をつかうが，「沖縄の産業」の場合は「ひろし君の沖縄旅行記」をメインに授業をすすめている。

以上のことから「沖縄の産業」の特徴とは，読み物資料から「どんな」「なぜ」といった疑問を班ごとに発表し合った後に，生徒全員でそれらの仮説を考えるという流れである。

横山遥

「沖縄の産業」は疑問解決型の授業であったと私は考える。「沖縄県の産業」の授業では生徒が自分なり，または自分たちなりの見解を発言することが多かった。その点において「ヨーロッパの農業」では生徒が発言することは多かったが，なに？どこで？だれが？のように正解が 1 つしかない一問一答の発言ばかりであった。一方で「沖縄の産業」では「語句についての疑問」「地理的事象の原因についての疑問」を個人で考えたものを班で意見をまとめ，それをクラス全体で解決していくという流れで授業が進められており，班ででた疑問からさらに新しい疑問を生み出し，それを解決することでひとつの疑問を深めていた。生徒の疑問から授業がなりたち，行き詰った時には教師が「困ったね」とゆさぶる。そうすると別の可能性もあるのでは，など生徒が新たに見解を考え発表する，という討議のスタイルで授業ができていた。

また，資料の使い方にも工夫が見られた。読み物資料『ひろし君の沖縄旅行記』は生徒にも親近感がわき，本州に住む人の目線で沖縄を見ることができた。旅行パンフレットの

写真や，広島から沖縄の航空便のデータも用い，「ヨーロッパの農業」と同様に身近なものを使うことで子どもたちの興味関心をつかんでいた。しかし「ヨーロッパの農業」と違う資料の使い方も見られた。まず黒板の隣に大きな日本列島の地図を提示することで，沖縄の位置の確認や本州との比較ができていた。また『ひろし君の沖縄旅行記』の主観的な文章から「本当に水田は少ないのかな？」と疑い，その情報を一般化する過程において，ひろし君の感想を裏付けるために別の資料（地図帳の統計）を用い生徒各々が調べていた。また，生徒がもちそうな疑問をあらかじめ考え，その見解に必要なデータも用意していた。